＜論文＞

教員としての資質を育む長期学校体験実習
－その成果と課題－

女子栄養大学教授　遠藤　伸子
同　　教授　　野中　靜
同　准教授　　大沼久美子
同　専任講師　久保田美穂
同　専任講師　鞠子　佳香
同　専任講師　深田耕一郎

1　はじめに

1）学校教育の現状とこれからの学校教育

知識基盤社会の到来と情報通信技術の急速な発展，社会・経済のグローバル化や少子高齢化の進展など，社会は大きく変化している。近年は，人工知能の研究やビッグデータの活用等による様々な分野における調査研究手法の開発が進められており，将来，こうした新たな知識や技術の活用により，社会の進歩や変化のスピードは速まる可能性がある。このような変化の中，様々な分野で活躍できる質の高い人材育成が不可欠であり、こうした人材育成の中核を担うのが学校教育である。学校における教育環境を充実させ，学校が組織として力を発揮できる体制を充実させるとともに教育の直接の担い手である教員の資質能力を向上させることが最も重要である [1]。

「教育は人なり」といわれるように，教員は教育職員免許法をはじめとした各種法律等により，教員の養成・採用・研修の充実がなされている。教員の資質能力の向上については，教育基本法第９条において「法律に定める学校の教員は，自己の崇高な使命を深く自覚し，絶えず研究と修養に励み，その職責の遂行に努めなければならない」，「前項の教員については，その使命と職責の重要性にかんがみ，その身分は尊重され，待遇の適正が期せられるとともに，養成と研修の充実が図られなければならない」とされている。教員の資質能力の向上は，教員自身の責務であるとともに，国，教育委員会，学校などの関係者にとっても重要な責務である [1]。

一方で、学校教育を取り巻く環境は大きく変化している。かつては，教員に採用された後，学校現場における実践の中で，経験豊富な先輩教員から経験の少ない若手教員へと知識・技能が伝承されることで資質能力の向上が図られてきた。しかし，近年の教員の大量退職，大量採用の影響により，必ずしもかつてのような先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承が図られていない状況があるといった指摘がある。教員としての職能成長が教職生活全体を通じて行われるものであることを踏まえ，養成段階は，「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」を行う段階であることを改めて認識することが重要である [1] といわれる。

2）教員養成段階に求められる資質能力

教員養成段階に求められる資質能力には、1 つに、子供たちに，知識や技能の修得のみならず，これらを活用して子供たちが課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力及び主体的に学習に取り組む態度を育む指導力が挙げられる。その際，課題の発見・解

決に向けた主体的・協働的な学び（アクティブ・ラーニング）の視点に立った指導・学習環境の設計や ICT を活用した指導など，様々な学習を展開する上で必要な指導力を身に付けることが必要である。2 つに、特別支援教育の推進，小学校における外国語教育の早期化・教科化，道徳の「特別の教科」化，幼小接続をはじめとした学校間連携等，近年の教育改革の方向に合わせた教職課程の改善を図るとともに，生徒指導や学級経営（養護教諭は保健室経営）を行う力の育成にも対応することが重要であるといわれる。幼児，児童，生徒や学校・地域の実情を踏まえて，各教科等の学習を通じて育成すべき資質能力を考え，教育課程を編成し実施する「カリキュラム・マネジメント」に関する基礎的な能力を身に付ける[1]ことも必要な資質能力といわれる。3 つに、教員としての使命感や幼児，児童，生徒の発達に対する理解など，基本的な知識や能力を備えていることはもとより，大きく変動する社会の中での教育の在り方に関する理解や，多様化した保護者の関心や要求に対応できる豊かな人間性とたくましさ，幼稚園，小・中学校をはじめとした各学校等の特色や関係性に関する幅広い知見，地域との連携・協働を円滑に行うための資質を備えた教員を養成することが重要である。教員養成課程を有する大学は、実践的指導力の基礎の育成に資するとともに教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせるための機会として，学校現場や教職を体験させる機会を充実させることが必要である[1]との指摘がなされている。

3）総合的・体系的な教員養成段と学校インターンシップ（図 1）

これらの教員養成上の重要課題に適切に対応し，大学の個性や特色を発揮した教員養成を行うためには，養成段階で真に必要な基礎力を明確にした上で，大学における教育課程の科目全体を精選し、総合的かつ体系的に教員の養成を図っていくような取組が必要である。このことから、筆者らは数年前より科目の精選に努めてきた。平成２４年８月の中央教育審議会答申 15 において「教員になる前の教育は大学，教員になった後の研修は教育委員会という，断絶した役割分担から脱却し，教育委員会と大学との連携・協働により教職生活全体を通じた一体的な改革，学び続ける教員を支援する仕組みを構築する必要がある」との指摘がある。さらには、学校インターンシップの実施や導入を求める声もある。これらをふまえ、本学保健養護専攻においては、大学が所在する坂戸市、鶴ヶ島市の全小中学校及び包括的連携協定下にある埼玉県の県立高校 2 校と連携し、「長期学校体験実習」を平成 27 年度より科目新設した（図 2)。平成 29 年度は 3 年目を迎える。長期学校体験実習は、平成 17 年度より実施していた「学校サポート活動」を拡充・発展させたものでもあり、その内容は、まさに学校インターンシップそのものである。

学校インターンシップは、教員養成系の学部や学科を中心に，教職課程の学生に導入が図られている。学校現場において教育活動や校務，部活動などに関する支援や補助業務など学校における諸活動を体験しながら、学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで，学校現場をより深く知ることができる。この経験は既存の教育実習と相まって，理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である[1]との指摘がある。また，学校インターンシップは学生がこれからの教員に求められる資質能力を理解し，自らの教員としての適格性を把握するための機会としても有意義である。学生を受け入れる学校側においても学校の様々な活動を支援する地域人材の確保の観点から有益であるといわれる。一方，学校インターンシップの実施に当たっては，既存の教育実習と

役割分担の明確化を図るとともに，その円滑かつ確実な実施に向けて，受入れ校の確保や実施内容の検討等のための教育委員会や学校と大学との連携体制の構築，大学による学生に対する事前及び事後の指導の適切な実施，学生側と受入れ校側のニーズやメリットを把握するための情報提供の実施など，環境整備について今後十分に検討することが必要である[1]といわれる。

4）保健養護専攻における新設科目「長期学校体験実習」の意義

本学本専攻においては、在籍する学生のほとんどが養護教諭をめざして大学に入学し、卒業時も 9 割以上が養護教諭や学校関係の職に就くことから、長期学校体験実習を単位化した。長期学校体験実習の目的は、一定期間、連続して学校を体験することで、学校の風土や文化に触れ、子どもの実態や教職員の仕事を知り、教員になることの魅力や素晴らしさとともに厳しさを感じる体験し、学習段階の早期に教職に就くことの動機づけを高め、その後の大学内外での学びに対し、自らが能動的且つ計画的に取り組む学生となるための契機とすることである。この点は開放制の教員養成をしている大学ではなし得ない、本専攻の最大の特徴であり魅力でもある。

女子栄養大学では、昭和 55 年より養護教諭の養成を開始し、平成 28 年度までに 1700 名余の養護教諭を輩出してきた。卒業生は全国の小・中・高・特別支援学校に勤務し、大学を置く埼玉県や東京都では 500 校を超える学校の保健室で児童生徒の健康の保持増進に重要な役割を果たしている。変化の激しい時代のニーズに即戦力として対応できる豊かでたくましい人間性と専門性の高い実践的指導力を兼ね備えた養護教諭を養成するためには、今まで以上に「理論と実践の往還」は重要である。長期学校体験実習はまさに理論と実践を往還する体験的な学修科目であり、教職性を育む基礎となる重要な実習科目として位置づけている。実施にあたっては、担当教員及び実験実習助手が相互に連携・分担・協働して学生を支援するとともに、坂戸市、鶴ヶ島市、埼玉県の各教育委員会担当者や実習校の校長等との連携を密にし、実習期間中は担当教員が巡回指導に出向くなど、養成現場と学校現場が協働し、共に人間性豊かで教育的愛情にあふれる教員の育成に努めている。

5）長期学校体験実習の概要

長期学校体験実習は、2 年次後期に選択科目（4 単位）として開講している。長期学校体験実習に先立ち、本科目履修者は長期学校体験実習指導（2 単位）を履修するものとしている。長期学校体験実習指導は、事前指導及び事後指導からなる。長期学校体験実習は、1 期と中間指導、2 期からなる。1 期は、後期が始まる 9 月第 4 週の火曜日、木曜日、金曜日の終日、週 3 日 4 週間（12 日間）にわたって実施する。1 期が終了した翌週は中間指導を行う。中間指導は、「魅力ある教師」「信頼される教師」とはどのような教師であったかについて、グループで協議し、図式化して発表し合う。中間指導最終日には、2 期の目標を立てる。2 期は 10 月第 4 週から 4 週間（12 日間）実施する。1 期と 2 期は異なる学校で実習を行う。学生は可能な限り小学校と中学・高等学校のいずれかを経験できるよう実習先を配置する。実習校の配置にあたっては、学生から希望調書をとり、第 5 希望まで記入させ、いずれかの学校に配置できるように配慮する。2 期終了後は、事後指導において、実習報告会開催のための発表準備等を行う。

また、本実習の遂行にあたっては、学生実行委員会を組織し、学生が主体的に関わるようにしている。事前指導における交通安全・防犯教室、長期学校体験実習報告会、実習校

を対象とした長期学校体験実習事前説明会の運営準備・補助、次年度に履修する後輩の相談役の役割も果たすなど、学び合う共同体としての意識が持てるよう配慮する。

2　本研究の目的

本稿では、「長期学校体験実習」科目新設から 3 年を経過した現在、学生評価を振り返ることにより、本実習の成果と課題を明らかにし、今後の学生教育に資することを目的とした。

3　方法

平成 27 年度から平成 29 年度に「長期学校体験実習」（2 年後期：選択：4 単位）を履修した学生が回答した、記名式自記式アンケート(「長期学校体験実習事後評価アンケート」)の単純集計及び自由記述集計を検討した。

4　倫理的配慮

長期学校体験実習事後評価アンケートの実施にあたっては、学生に対して「長期学校体験実習事後評価アンケート」の目的や結果の活用について口頭で説明し同意を得た。集計にあたっては個人名が特定されないよう ID 化して集計を行った。

5　結果

1）長期学校体験実習履修状況

長期学校体験実習開講以来の履修者状況を表 1 に示す。選択科目であるが、ほとんどの学生が本実習を履修し、単位を取得していることがわかる。

表 1「長期学校体験実習」履修者状況（人）

	在籍数	履修者	単位取得者
平成 27 年度	62	61	59
平成 28 年度	59	57	56
平成 29 年度	66	66	65

2）学生の自己評価

（1）長期学校体験実習履修評価

長期学校体験実習の自己評価は「実習に参加してよかったと思うか」について「とてもよかった・よかった・どちらとも言えない・よくなかった」の 4 件法で回答を得た。

実習に出向いた学校種（小学校・中学校・高等学校）別に集計したところ（図３－１～図３－３）、小学校に長期学校体験実習に参加した学生の 96%以上が「実習に参加してよかった」と回答していた。実習初年度の平成 27 年度は、中学校に参加した学生の約 10%が「どちらともいえない」「よくなかった」と回答していたが、平成 28 年度、29 年度は小学校と変わりはなかった。

（2）長期学校体験実習後の教職への意識

実習に出向いた学校種（小学校・中学校・高等学校）別に評価を得た（図４－１～図４－３）。小学校に参加した学生の 94%以上が将来教職（小学校）に就きたいと回答しており、中学校に参加した学生は平成 27 年度を除き 98%以上が将来教職（中学校）に就きたいと回答した。高校に参加した学生も同様の傾向であった。

平成 29 年度に「実習に参加してよかった」と回答した者が、どのようなことがよかったと感じているか自由記述で回答を得た結果は表２のとおりである。

（３）長期学校体験実習における要望

事前指導や実習を通じての要望については表３のとおりである。

６　考察

１）長期学校体験実習の成果

（１）学生の総合評価

履修者の 9 割以上が「実習に参加してよかった」と回答し、「将来、教職につきたい」と回答している割合も 9 割以上であることから、学生は本実習を良好にとらえていることがわかる。高校での実習は、受入先が２校と少ないため、さらなる開拓を行い、成果を検証することが求められる。また、平成 27 年度に中学校に実習に行った学生の評価で「将来、教職にどちらかと言えば就きたくない」「未記入」と回答した割合が約 10%あった。それらの学生は、出向いた実習先の中学校に生徒指導上の課題を有する生徒が見られ、当該生徒の教師に対する態度や言動、言葉遣い、実習生（当該学生）に対する態度等が「将来教職にどちらかと言えば就きたくない」「未記入」という結果に影響を及ぼしたものと考える。

本実習の目的は、学校の風土や文化に触れ、子どもの実態や教職員の仕事を知り、教員になることの魅力や素晴らしさとともに厳しさを感じることで教職に就くことの動機づけを高めることである。学校の実態を教職員の目線で見たり、体験したりして、学生自身が自らの進路を再度考え直したり、養護教諭になりたいと言う気持ちを再度確認したりする機会となっていることが学生評価からわかる。

（２）児童生徒とのふれあいを通じた児童生徒理解の促進

実習に参加してよかった理由には、「児童との関わる機会、ふれあいが多かった。」「特別支援の児童とふれあい、初めての経験をたくさんできた。」「高学年の児童と関わることができた。」「児童達が可愛いく、休み時間まで充実していた。」「4 週間クラスに入るので、児童達とも仲良くなれるので良かった。」「発達障害のある児童と濃い関わりができた。」「担当の学級が決まっており、児童とより密な関係が作れた。」「成長段階を見ることができた。」「行事を通して生徒の成長を見ることができた。」「コミュニケーションをとることの難しさを感じた」「特別支援学級の生徒と関わることができた。」「相談室や部活などで生徒と関わることができた。」「生徒との交流を深めることができた。」などの記述が見られたことから児童生徒の発達段階や児童生徒理解が実感として得られたことがわかる。

（３）指導法の工夫や学校組織体制、教育的愛情

実習先で接する教師の姿は学生にとっての手本である。教師の児童生徒に対するまなざしは学生に大きな影響を与えている。「クラスに入って指導の仕方や接し方を学べた」「たくさん授業を見させていただいた」「発達段階に合わせた指導方法を学ぶことができた」「教師としてあるべき姿を想像することができた」「とても熱心にご指導をして頂いた」

「質問したい教職員との時間を設けてくださった」「先生方が、実習生に様々なことを教えてくれた」「非常に学校の教職員の方々の仲の良さを感じた」「学校全体での共通理解、常に最悪な事態を想定した行動をされていた」「学校組織を見て学ぶことができた」等の記述は、学校に行かなくては得られない学修の成果である。

（４）社会の厳しさ

一方、「社会の厳しさを知ることができた」「教職員の多忙さを知った」など職業としての教職や社会で働く一員としての厳しさについても実習を通じて実感している。教員は、児童生徒が登校する前に出勤し、「朝のあいさつ運動」等で児童生徒を校門で迎え、子どもの様子を観察している。朝早く出勤することは不慣れなため厳しいと感じる学生もいる。また、気配り・目配り・心配りにより気疲れをする学生もいる。気配り・目配り・心配りは、職務を円滑に遂行するための態度や配慮である。さらには、生徒指導や保護者対応が難しい場面に遭遇したり、授業等の準備に忙しい状況があったりなど、教科書には書かれていない「仕事」としての困難さに対して、「社会は厳しい」と感じるのは当然である。この実感は、人間としての成長につながる貴重な体験であると考える。勤労観や職業観の醸成にもつながる。「社会は厳しい」「教員の仕事は厳しい」でも「教師になりたい」と思えうのは、「子どもが好き」や「学校が好き」などの子ども観や教育観が育っている証であると考える。本実習で「私は教員には向いていない」と感じたり「こんな仕事はできない、自信がない」と感じる学生もいる。これも当然である。この実習を通じて、自身を振り返ることができるのも特徴的な点であると考える。

２）長期学校体験自習の課題と今後のあり方

（１）目的の周知徹底

養護教諭を志望する学生のため、保健室や養護教諭の職務を実習の内容に入れて欲しいという要望が挙げられている。実習内容の詳細については、当該学校の実態に即して当該学校が決定している。本実習の目的に照らせば、養護教諭の職務や保健室の機能についての内容は求めていない。養護教諭の職務や保健室の機能は 4 年次に開講される養護実習で学修する内容である。養護教諭の職務は養護教諭以外の教職員、保護者、地域の人々等との関係性の中で行われている。そういった人々との連携は欠かせない。学校体制や教職員の活動や職務内容、教職員の考え方等を学生段階でふれることにより、その後の実習や養護教諭になってからの職務が円滑に遂行できると考える。ゆえに、養護実習に出向く前に「学校」について知ることが重要であり、2 年次に本実習を開講し一定の学生評価を収めることができたことは、養護教諭養成にとって意義深いものと考える。

また、このような実習科目は他の養護教諭養成機関にはない学修である。本学の養護教諭養成の大きな特徴であると言える。そのことを学生自身にも自覚させ、本実習に臨むことができるよう、履修にあたってはなお一層の事前指導を徹底する必要があると考える。

（２）今後の課題

実習事前指導において実習先での教職員に対する挨拶の仕方や児童生徒に対する挨拶の仕方を体験的に指導している。実習における自身の目的、声の出し方、視線や言葉づかい、服装や態度等、体験的に学び、学生が相互に評価し合い、修正を重ねてよりよいものにしていく過程は、学生にとっても好評である。今後も「挨拶練習」については継続する

と共に、「児童生徒との接し方」について事前に指導して欲しいといった要望についても配慮できるように事前指導内容を検討することが求められる。

また、実習先との連携は欠かせない。担当教員は実習先に訪問指導に出向き、当該学校の指導教員と面談する中で学生の状況を把握し、相互に学生の課題を共有して個別の支援につなげている。それにより学生に達成感を味わわせることも重要である。きめ細かな支援のためには、担当教員間の情報共有や教職員の配置は課題である。同時に実習先指導教員との連絡を密に取り合うことも学校現場の多忙感との関連から課題である。養護教諭の教員免許状を取得したものは小学校、中学校、高等学校、特別支援学校すべての学校種に着任することが可能である。現在の実習先は、小学校、中学校が中心であり、高等学校や特別支援学校の実習先の確保や開拓も課題である。

7　おわりに

長期学校体験実習として科目新設して 3 年が経過した。学生評価は良好であり、一定の成果を収めることができたと考える。今後は、高等学校や特別支援学校の実習先の開拓及び学生の個別に支援の充実を図ることが課題である。

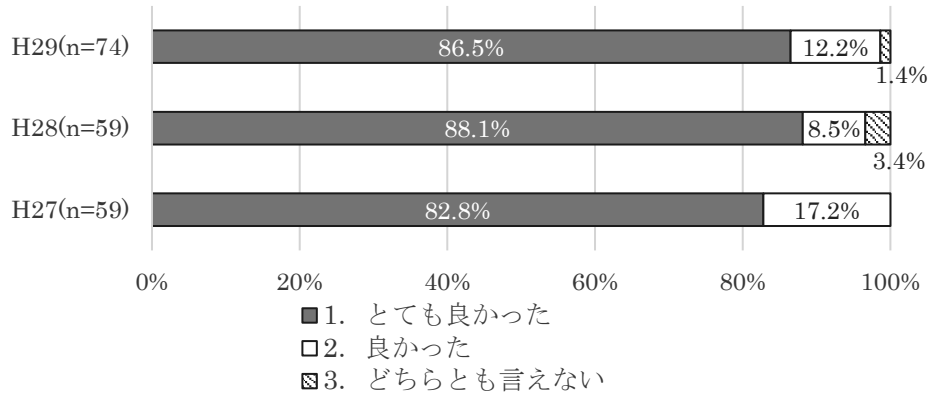


図３－１　実習に参加して良かったと思いますか。
【小学校】

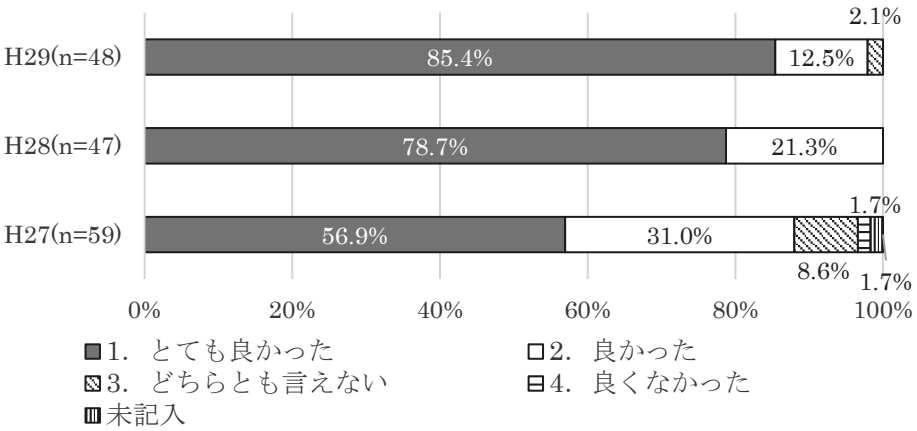


図３－２　実習に参加して良かったと思いますか。
【中学校】

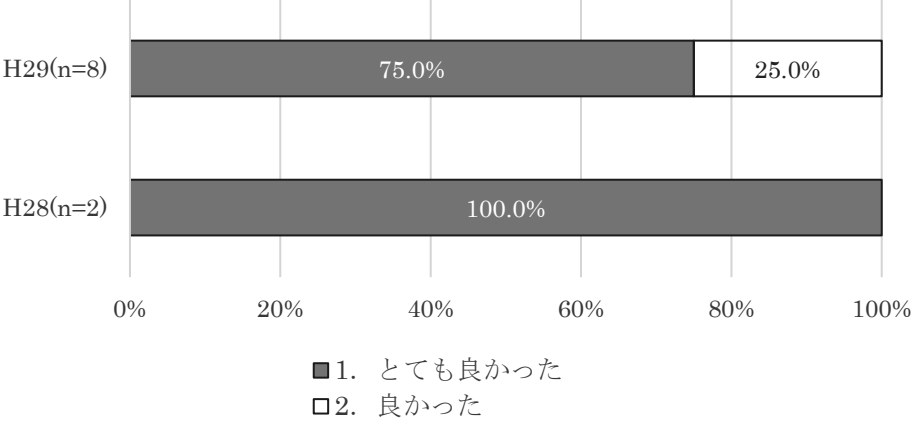


図３－３　実習に参加して良かったと思いますか。
【高等学校】

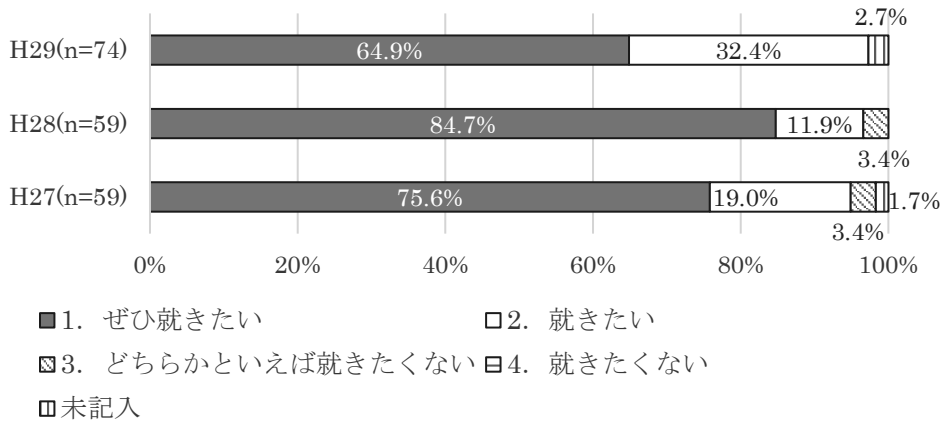


図４－１　実習に参加して教職に就きたいと思いましたか。【小学校経験者】

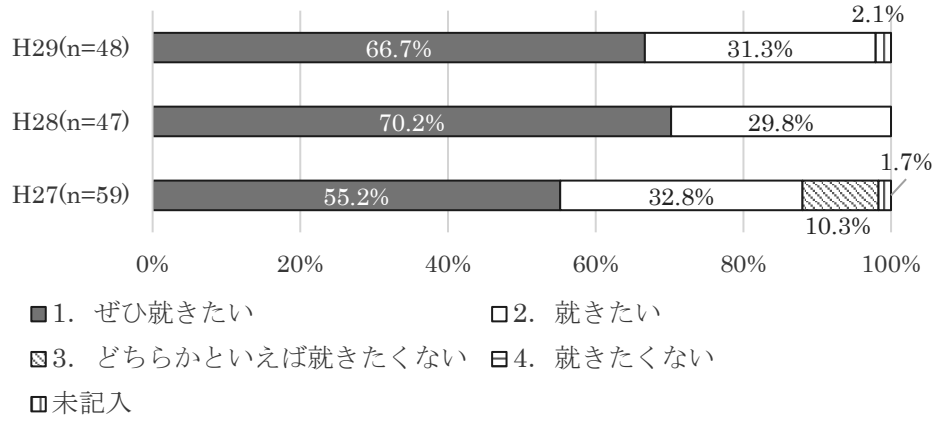


図４－２　実習に参加して、教職に就きたいと思いましたか。【中学校経験者】

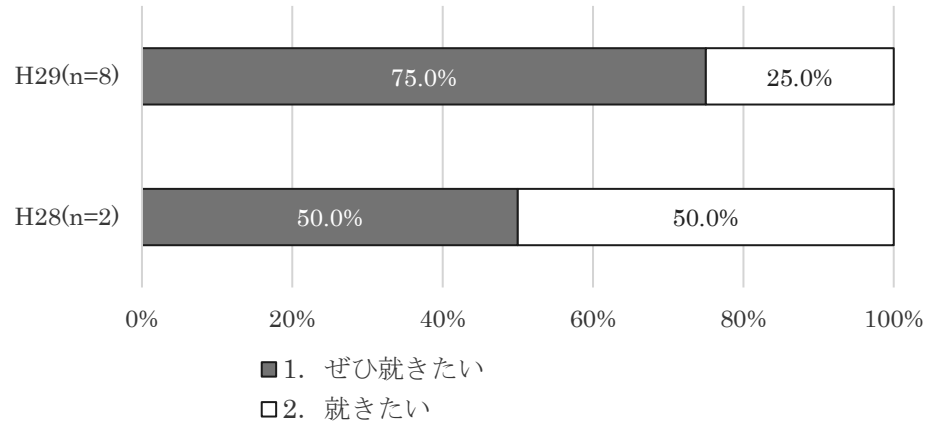


図４－３　実習に参加して、教職に就きたいと思いましたか。【高校経験者】

表２　実習に参加してよかった理由　　＊複数回答

学校種	内容の詳細	人数
小学校	児童との関わる機会、ふれあいが多かった。	11
	各学年の児童の特徴、発達段階を学ぶことができた。	5
	児童生徒の実態を知ることができた為。	4
	普段することができない体験が多く出来たから。	4
	クラスに入って指導の仕方や接し方を学べたため。	3
	とても熱心にご指導をして頂いた。	3
	モチベーションが上がるきっかけになった。	3
	実際に現場に行かないと知ることのできない学びを得ることができたため。	3
	特別支援の児童とふれあい、初めての経験をたくさんできたため。	2
	様々な児童がいること、それぞれの児童にあった対応が必要であることなどを学べた。	2
	1 日同じクラスに入らせていただいたため、そのクラスの雰囲気や児童一人一人の特性がつかみやすかったから。	2
	初めて学校の先生の仕事を間近に見ることで多くの学びがあったため。	2
	保健室に多く入ることができた。	2
	実際に健康診断などのお手伝いをして勉強になったから。	2
	学校組織のあり方や養護教諭の対応の仕方を学ぶことができたため。	2
	たくさん授業を見させていただいたが、何もすることがないと言われてしまった。	1
	先生として学級にはいり、指導する事の難しさを学ぶことができたため。	1
	発達段階に合わせた指導方法を学ぶことができたため。	1
	教師としてあるべき姿を想像することができた。	1
	質問したい教職員との時間を設けてくださった。	1
	先生方が、実習生に様々なことを教えてくれた	1
	非常に学校の教職員の方々の仲の良さを感じた。	1
	学校全体での共通理解、常に最悪な事態を想定した行動をされていた。	1
	学校組織を見て学ぶことができた。	1
	高学年の児童と関わることができた。	1
	児童達が可愛いく、休み時間まで充実していた。	1
	4 週間クラスに入るので、児童達とも仲良くなれるので良かった。	1
	発達障害のある児童と濃い関わりができたから。	1
	担当の学級が決まっており、児童とより密な関係が作れたから。	1

	高学年との交流が少なかった為。	1
	相談室登校の児童と関わり、たくさんコミュニケーションをとれたから。	1
	相談室に登校する児童の対応をして、児童との関わり方の難しさを体験する事ができたから。	1
	実際に学校で実習できる機会が少ないので、教室や児童の雰囲気を知ることができてよかった。	1
	実習に行ったことで、大学の授業を少しでもきちんと受けようと思うようになった。	1
	学校現場で児童の実態や教員の仕事を見ることで、将来のイメージをつけることができたから。	1
	自分自身の良いところ、伸ばしていかなければならないところがわかった。	1
	学級に入る回数が多かった。	1
	幅広い仕事を体験することができた。	1
	教職員の多忙さを感じた。	1
	実習前は知らなかった現場のことを知ることができた。	1
	保健室や特定の学年以外の授業はあまり見られなかったため。	1
	社会の厳しさを学んだ。	1
	短い期間だったが、思い出が沢山出来たため。	1
	行事が多く、クラスに入るより、椅子や机を運んでいる時間の方が多かったため。	1
	日常の授業参観だけでなく、特別な活動に沢山参加することができたため。	1
	朝から児童が帰宅するまでと、教師の職務をより深く体験できたため。	1
	保健室の一日の流れを知ることができたため。	1
中学校	中学生の実態を知ることができたため。	15
	教員の生徒への接し方や指導の仕方を見ることができたため。	10
	養護教諭の職務や保健室での仕事を学ぶことができたため。	10
	積極的に生徒と関わることができたため。	9
	多くの学びを得ることができたため。	7
	小学校と中学校の違いが分かったため。	7
	学校の組織としての連携を学ぶことができたため。	5
	中学生の保健室での実態を知ることができたため。	4
	貴重な経験ができたため	3
	学校の雰囲気を知ることができたため。	2
	貴重なお話をしていただけたため。	2
	成長段階を見ることができたため。	2

	行事を通して生徒の成長を見ることができたため。	2
	先生の授業での工夫を学ぶことができたため。	2
	コミュニケーションをとることの難しさを感じたため。	2
	特別支援学級の生徒と関わることができたため。	1
	相談室や部活などで生徒と関わることができたため。	1
	教職員の職務を学ぶことができたため。	1
	毎時間クラスが違い生徒を覚えにくかったため。	1
	もっと先生方のお仕事を知りたかったため。	1
	生徒との交流を深めることができたため。	1
	社会の厳しさをしることができた	1
	実習生がやりたいこと、学びが深まることを体験させてくれたため。	1
	より学びたいことを明確にすることができた。	1
	すべての学年、学級に入りクラスの雰囲気や個性を身をもって感じることができたため。	1
	保健指導の資材作成も任せてもらえて、良い経験となった	1
	新たなる目標ができた	1
高校	女子高生特有の悩みや様子などを実際に見ることができたため。	1
	教職員の方々の連携が重要であることを改めて感じたため。	1
	小学校との違いを発見することができた。	1

表３　事前指導や実習を通じての要望　　＊複数回答

	内容の詳細	人数
小学校	実習の流れ、一日の流れが事前に知りたい。	4
	挨拶指導は今後も続けて欲しい。	4
	もう少し保健室での実習をしたかった。	3
	実習内容、作業内容を知りたい。	2
	小学校の特徴を事前に知りたかった。	2
	開始時刻や終了時刻を教えていただきたかった。	2
	養護教諭の先生と一言も話せず、保健室に一歩も入ることがなかったので、その時間を作って欲しかった。	2
	児童生徒対応の受け答えの仕方を事前に指導して欲しい。	2
	昨年の実習の様子を具体的に説明してほしい。	1
	先輩方からのお話がとても安心できたので今後も続けて欲しい。	1
	説明会やオリエンテーションにかかる時間をはじめに教えて欲しかった。	1
	実習校の様子が事前に知りたかった。	1
	他の学校がどのようなスタイルで学級に入ったり作業をしているのかを知りたい。	1
	教職員の仕事について校内清掃や書類配布以外にも知りたかった。	1
	先輩との引き継ぎをもう少し早くやると、より余裕を持って実習に臨むことが出来たと思う。	1
	小学校１年生が中心だったので、他学年に入る機会も頂けたらと思った。	1
	提出物の期限の変更についてもう少し早く連絡していただけるとありがたいと思った。	1
中学校	挨拶の仕方は今後も指導して欲しい。	3
	出勤時間と活動内容を事前に知りたい。	3
	中学校の特徴を知りたい。	2
	学校の雰囲気を知りたい。	2
	移動手段（通勤手段）を知りたい。	2
	先輩から実習校の様子など質問できる時間がほしい。	1
	どんなアドバイスを先輩は実習先でいただいたのか知りたい。	1
	生徒や先生方の様子を知りたい。	1
	給食費についての説明をして欲しい。	1
	中学生に性行為のことや、連絡先を聞かれた際の生徒対応の仕方について指導してほしかった。	1
	授業参加時の注意点を知りたい。	1
	生徒からの質問の対応の仕方を知りたい。	1
	保健室に入ることができるかどうか知りたい。	1
高校	新しい実習先の場合は、先輩からの引継ぎもないので、実習先の情報や資料を自分で集めるよう促してほしい。	1

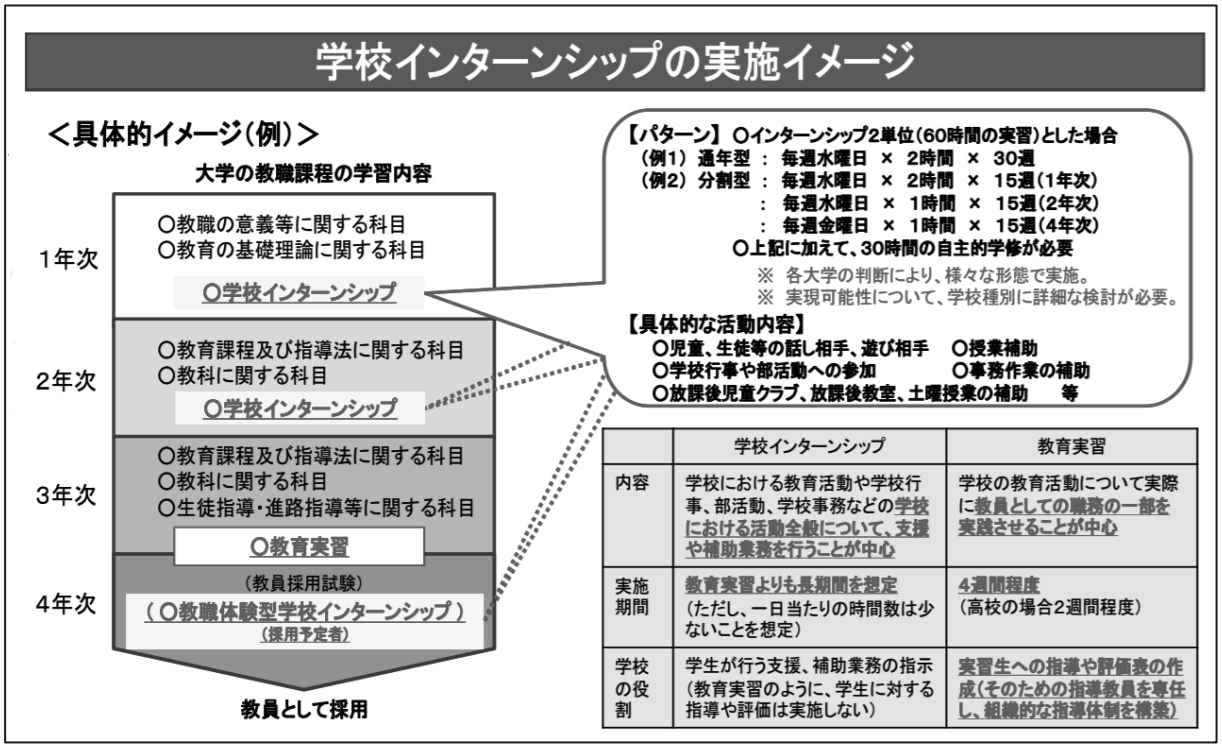


図 1　学校インターンシップと教育実習の違い[1)]

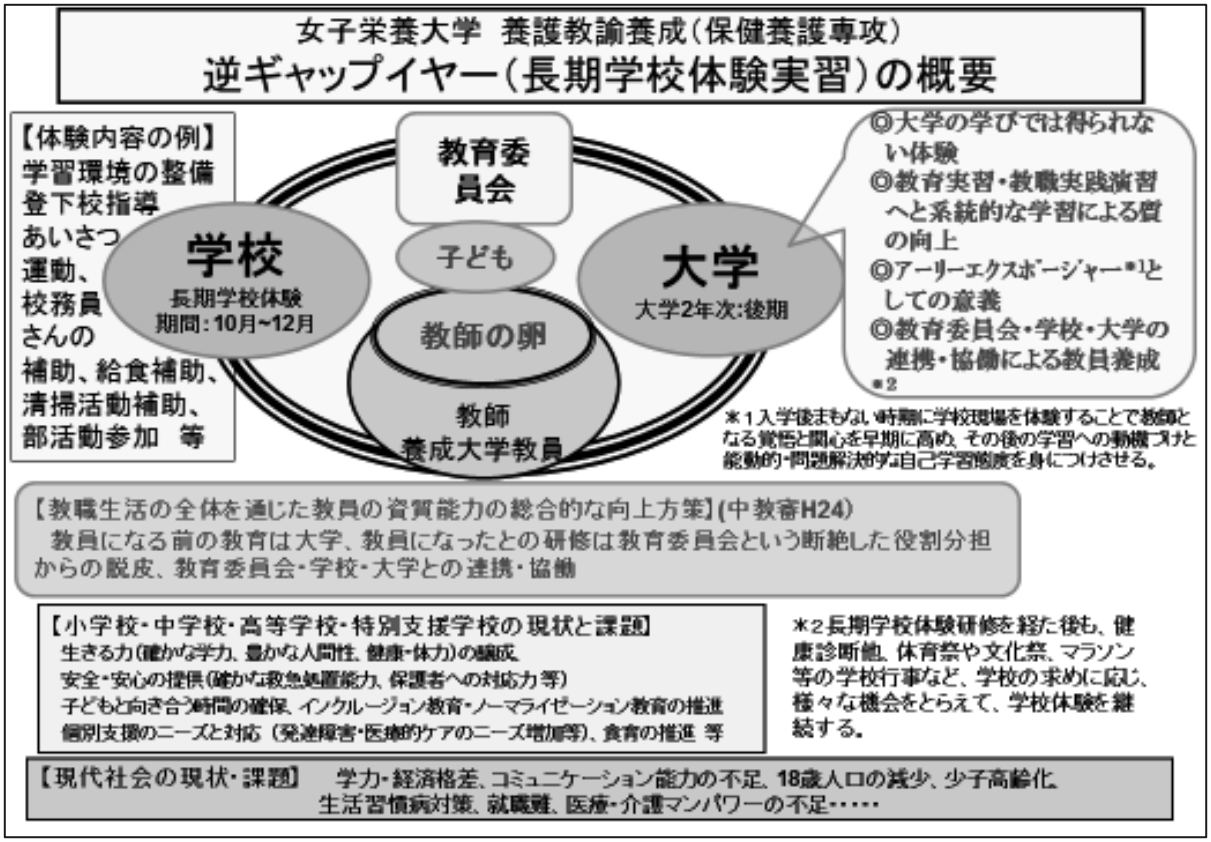


図 2　本学における長期学校体験自習の概要

1）中央教育審議会：これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）（中教審第 184 号）平成 27 年 12 月 21 日